

0648

昭和九年五月

軍艦實驗研究録

海

軍

昭和八年七月 大倉納

軍艦實驗研究録目次

海 軍

昭和八年七月 大倉總

緒言

第一章 各部隊ニ於ケル軍艦利用法研究

第一節 防備隊ニ於ケル軍艦利用法

第二節 航空隊ニ於ケル軍艦利用法

第三節 上海海軍特別陸戰隊ニ於ケル軍艦利用法

一 戰車隊ヨリノ通信

二 砲隊、銃隊ヨリノ通信

第四節 各隊ニ於ケル軍艦通信ノ現状

第五節 平戰時所要軍艦數ノ研究

別表第一 昭和八年度海軍軍艦實驗研究計畫ニ依ル

各隊應役艦數

別表第二 昭和八年度海軍大演習中軍艦動員數ニ配付

區分及通信回數(橫防)

第六節 軍艦戰術的價值

第二章 艦、歸巢能力研究

第一節 艦、歸巢性

第二節 艦、夜間視力

第三節 軍艦通信速力並通信距離

一 晝間艦舍(陸上固定)

二 夜間艦舍(陸上固定)

別表第三 昭和八年三月至九年一月至二十年間各飼

育廳ニ於ケル軍艦通信綜合表

別表第四 軍艦通信高速度記錄(橫防)

第四節 軍艦通信精度

第三章 夜間艦養成法研究

海軍

昭和八年七月 大倉納

第一節 研究經過概要

第二節 夜間嚮養養成要旨

第三節 夜間活動意志誘起

第四節 夜間於各方向判定勵發

第五節 施設

一 嚮舍位置

二 嚮舍(第一、二、三、四圖參照)

第六節 訓練

第一期 基礎訓練(暮曉飛翔訓練)

第二期 延伸訓練

一 夜間放嚮訓練

二 明暗裝置使用法

三 明暗度記錄

海軍

昭和八年七月 大倉納

四 障礙物避行訓練

五 荒天訓練

六 夜間給餌

第三期 蕃殖並保能訓練

第七節 従事員、努力ト其結果

附

一 夜間訓練計畫例

二 昭和八年四月一日ヨリ翌年三月末ニ至ル一ケ年間横須

賀防備隊ニ於ケル軍艦夜間通信成績概況

第四章 強力艦養成法

總則

第一節 艦舍

第二節 飼糧

一	飼糧、配合	海 軍
二	給餌	
第三節	蕃殖	
第四節	使用鴿	
第五節	訓練	
一	舍外飛翔	
二	呼込調教	
三	放鴿訓練	
四	荒天訓練	
五	障礙物避行訓練	
六	應用訓練	
第六節	衛生	
第五章	艦(艇)上鴿舎、研究	

海

軍

昭和八年七月 大倉納

第一節 經過概要

一 若宮艦舎

二 横空第十二號艇艦舎

三 春日艦舎

四 高崎艦舎 金剛艦舎 迅鯨艦舎 能登呂艦舎

五 横防艇上艦舎

第二節 各艦(艇)上艦舎、研究實驗事項並其成績

一 若宮艦舎

二 金剛艦舎

三 横防艇上艦舎

第三節 艦上艦、成績良好ナラザリシ理由

第四節 艦上艦トシテ採用スベキ艦

第五節 艦上艦舎、訓練法

海 軍

昭和八年七月 大倉 綱

海軍

昭和八年七月 大倉納

第六節 航海中通信ヲナシ得準備トシテ必要ナル三事項

第七節 艦上艦ノ實用價值

第八節 艦上艦舎ノ型式

一 大型分解式艦舎(附圖參照)

二 小型分解式艦舎

附圖

第六章 特設艦舎ノ研究

第一節 「サイパン」特設艦舎

一 訓練計畫

二 携行物件

三 經過並成績

四 所見

第二節 刺崎特設艦舎

一 訓練計畫

二 經過並成績

三 所見

第七章 往復通信艦の研究

第一節 我海軍に於ける通信艦往復通信實施概況

第二節 往復通信艦養成實施經過例

第三節 一般所見

一 準備事項並完成所要日數

二 通信艦往復通信價值

別表第五 (昭和五年横防横空間往復通信艦養成

經過並成績)

第八章 酷寒地に於ける通信艦蕃殖法研究

一 設備

海 軍

昭和八年七月 大倉裕

二 管理上ノ注意

附 昭和八年度大防ニ於テ實施セル酷暑・寒・蕃殖法中特ニ

參考トナルベキ事項

第九章 艦ハガフテリヤニ就テ

一 症 状

二 誘 因

三 療 法

四 豫 防 法

附 部内軍艦飼育廳ニ於テハガフテリヤニ襲ハレル前例

並 經 過 概 要

第十章 軍艦術教育

第一節 教育制度

第二節 軍艦術講習實施經過並所見 (昭和八年准官以上)
(昭和九年下士官未)

海軍

昭和八年七月 大倉納

一 准士官以上ノ部

二 下士官兵ノ部

第三節 軍艦術競技

一 競技種類並實施要領（昭和八年度横防ニ於テ實施（主））

二 成績調査

三 制令規約

四 講評並訓示

附

一 昭和八年度軍艦競技綜合成績表（横防）

二 軍艦術講習開始ニ際シ命令訓示（横防）

第十一章 軍艦品種改善

一 訓練ニ由ル不良艦淘汰

海軍

昭和八年七月 次倉納

二 優良種子ニヨル蕃殖

三 民間仔鳩講入

四 飼育管理法、改善ニ依ル鳩質ノ向上

第十二章 鳩ノ氣象トノ關係(前横室司令原大佐ノ研究)

附 横須賀地方天界ノ變化ニ依ル天氣豫報

第十三章 害鳥驅除法

附 横須賀防備隊内獵銃取扱規程

附錄 海軍軍鳩實驗研究經過

目次(終)

海軍

昭和八年七月 大倉納

軍艦實驗研究録

緒言

一 本篇ハ海軍軍艦實驗研究ニ関スル事項中特に
参考トナルヘキ資料ヲ取纏メ「軍艦實驗研究録」ト
シテ編集スルモノナリ

二 海軍軍艦實驗研究開始以來ノ研究経過ハ海軍
教育局發刊「軍艦通信参考書」ニ詳記シアルヲ
以テ本篇ハ其後ヲ承ケ昭和九年三月末迄ノ事項
ヲ記載セリ

三 軍艦飼育取扱等ニ関スル参考書ハ稿ヲ別ニシテ
編集スル機會アルヘシ

第一章 各部隊に於ける軍艦利用法研究

第一節 防備隊に於ける軍艦利用法

防備隊船艇に無線電信機ノ裝備ナキモノ多ク且所望ノ電信員ヲ得ルト困難ナル現状に於てハ出動船艇が作業進捗ノ状況ヲ報告ス或ハ危険ノ際ニ救助ヲ求ル場合等本部トノ通信ハ一ニ軍艦ニ依ル外ナラ殊ニ戰時多數ノ徴傭船舶及漁船商船等ヲ哨戒其他ニ利用スル場合所要電信機ノ供給要員ノ充當等困難ナルベク又仮令之等ニ悉ク無線電ヲ裝備シ得ルトスルモ電波ニ依ル空間攪乱ヲ顧慮スルトキ海面防禦部隊ハ簡單確實ナル軍艦通信ヲ大ニ利用スベキ事明カナリ

尚防備隊ノ軍艦ハ軍ニ同隊ノ通信ノミナラズ該軍港要港ノ通信機關トシテ次ノ場合ニ活用シ得

不附属船艇より主副通信

發射訓練等、於ケル通信、最有利ナリ

只附属艦艇より補助通信

前項と同じ

ハ鎮守府要港部麾下小船艇派遣、際、通信

救難作業（主トシテ港務部）等、急遽船艇ヲ派遣
スル場合等、最有効ナリ

ニ陸上派遣員より通信

移動区域、小ナル陸上派遣員より通信、適ス

第二節 航空隊、於ケル軍艦利用法

基地或ハ隊外派遣、自動車又ハ汽艇（主トシテ機上發射爆
撃等、監視艇）に搭載、航空隊ト通信、有効ナリ

特、飛行機遭難、際、無線電信機其他、通信機用、使

用不可能な場合本部へ報告通信に使用し又救難用汽艇、自動車等を利用する場合其價值極メ大ナリ戦時無線封止ヲ実施スル場合ハ勿論通信連絡杜絶セル際通信トシテ最適切ナルハ前節ニ記述セル處ナリ

第三節 上海海軍特別陸戦隊に於ける軍鳩利用法

一 戦車隊より通信

戦車隊ハ其行動迅速不羈ニシテ之ガ通信ニ電話ノ使用不可能ナル上現在、無電兵器ヲ以テシテ、此裝備困難ナリ從テ戦車、装甲車等破壊サレタル際遠距離偵察報告或ハ戦況、依リ至急救援ヲ要スルカ如キ場合、於テ通信ハ軍鳩通信ニ依ル外ナシ

二 砲隊、銃隊より通信

現在陸戦隊に於テハ銃隊、砲隊共、牽引車ヲ利用シ急速

海軍

昭和八年七月 大倉納

移動ヲ行ヒツアリサレハ電話架設ハ銃隊砲隊等ニ追隨
スルヲ得ズ部隊移動直後ニ於ケル通信ハ主トシテ無線及
軍鳩ニ依ル外ナリ然モ無線長數ニ限リアリ無線ナキ
際或ハ空中ノ狀況ニ依リ無線通信困難ナル際或ハ遠距
離ハ候等ニシテ至急報告ヲ要スルモノ等ハ軍鳩通信
ニ依ル外ナリ

尚上海附近通信ノ狀況ヲ摘記スルハ次ノ如シ

ハ上海ニ於ケル陸戦隊警備ハ是国防備計畫ニ依ル地域極
メテ廣範固カシ上警備地域外ニ於テモ日本人經營工場
相當多數ニ止レリ然モ其警備地區タルヤ到ル處支那
人多數居住シ事變勃發ノ際ニテハ便衣隊ノ活躍盛
ニシテ有線電話ノ切斷事故極メテ多キハ昭和七年上海
事變迄上海事變一週年記念日當時ニ徴シ明ナリ

海軍

昭和八年七月 大倉納

又上海の各國軍艦多数錠泊スルト上海市中ニ於ケル私設無線電信所多数ニ上リ通信管制ナク空中ノ攪乱甚タシ
 フ加フルニ空電ノ影響極メテ大ナリ

斯カル空中ノ状況ニ於テハ無線連絡ニ相當困難ナリ陸戦隊ニ於テハTM無線電信機ヲ以テ上海附近通信状況ヲ調査セシ昭和七年十月中旬ヨリ翌年二月ニ至ルニヶ月間ハ司令部ト豊田紡績間(約八軒)ニ於テ又通信殆ント不能ナリキ

斯ル地域ニ於テハ戦スルニ當リテハ正確ニシテ迅速ナル軍艦通信ノ重要ナルハ言フ俟タズ

因ニ豊田司令部間、軍艦通信時間ハ無線ノ諸費消時^有知^有ト同^一ナリ

口上海事変ニ際シテハ陸軍、楊陸掩護、吳淞砲台攻撃

海軍

昭和八年七月 大倉納

工作隊橋梁破壊或ハ吳淞日華及豊田紡績派遣隊ト司令部間通信等常ニ派遣

戦車隊砲隊各銃隊ト司令部間通信ニ從事シ極メ重要ナル通信任務ヲ遂行シ能ク其目的ヲ達成ス
(右昭和八年四月上海海軍特別陸戦隊通信隊長所見)

第四節 各隊ニ於ケル軍鳩通信ノ現状

各隊共主通信トシテ又副通信トシテ通特通所遺憾ナク利用シツ、アリ特防備隊ニ於テハ無線ヲ有セサル船艇主通信トシテ必要缺クハカサヤルモノナリ、昭和八年三月ヨリ翌年一月ニ至ル年間毎月軍鳩通信回数表如ク其成績ハ一般ニ良好ニシテ能ク通信目的達成セリ

年	隊	横防	足防	佐防	舞防	大防	銃防	馬防	横忠	霞忠	計
八	曲	二九	一二	四五	一七	二〇	一四	二	三一	〇	二五〇
四	百五	二	三九	四五	一五	一二	八	六	四	〇	二五〇

備考 (一)内、数字、通信用数中、含、夜間通信系又	計	二	九	二	二	二	九	八	七	六	五
	九 (五)	六 (三)	五 (四)	六 (七)	六 (一)	四 (二)	五 (一)	五 (五)	三 (四)	七 (六)	五 (九)
	二 番	九	三 四	二 六	一 二	二 一	九	二 〇	三 八	一 一	二 一
	五 三	四 二	一 五	四 二	一 七	四 四	三 八	五 七	五 六	七 〇	三 八
	二 七	九	一 〇	一 〇	一 二	三 〇	三 〇	二 九	三 五	二 五	一 九
	七 六	八	六	一 〇	一 六	一 五	一 二	一 七	三 二	六	二 二
	一 五	一 六	八	一 五	一 七	七	二 二	一 一	一 二	八	一 四
	八 二	九	六	五	四	一 〇	七	五	九	一	八
	三 八	五 五	三 七	一 五	三 六	四 七	三 二	三 二	三 六	四 二	一 三
	一 八	一 三	二 七	一 六	一 四	一 〇	八	八	七	五	〇
	六 六	二 四	二 〇	二 〇	一 八	二 二	二 九	三 一	三 四	二 五	一 九
	三	一	〇	〇	八	四	九	四	九	四	四

海

軍

昭和八年七月 大倉納

第五節 平時時所要軍艦数ノ研究

軍艦通信ハ通信多ク普通ニ月ノ軍艦ヲ使用シ重要通信、夜間通信及大候不良等場合ニ於ケル通信ニ在リテハ夫々必要ニ應ジ三羽以上ノ艦ヲ使用スルモノニシテ一船艇出動ニ際シ即日帰港ノ場合ニ於テ十羽乃至十五羽ノ軍艦ヲ搭載シ数日連続出動ノ場合ニ於テハ更に多数ノ軍艦ヲ搭載スル必要ヲ生スルモノナリ而シテ数船艇出動ノ場合ハ保安並分離行動等顧慮シ指揮艇以外船艇ニ相輔數ノ軍艦ヲ搭載スル必要アルヲ以テ昭和八年度海軍軍艦計画ニ依ル各飼育艦ニ於ケル應役艦數ハ平時所要軍艦數ノ最小限度ニシテ各飼育艦ニ於テ經費ノ關係上已ハク得ズ之ニ満足シツ、アル状態ナリ（別表第一参照）

戦時、アリテハ多数徴備船舶、哨戒艇機及陸上砲

海軍

昭和八年七月 大倉船

設等と軍艦ヲ使用スル且つ永續的ニ使用スル關係上嶋
ノ休養等ヲ顧慮シ平時約三倍ノ軍艦ヲ要スルコトハ
毎回ノ大演習ニ於テ痛感セラル

因ニ昭和八年夏海軍特別大演習中七月三十一日より八月
十九日ニ至ル二十日間ニ於ケル横須賀防備隊軍艦動
員数並通信回數別表第二ノ如シ

別表第一								
昭和(年度)海軍之鳩実験研究計画之依ル各隊應役鳩数								
(應役鳩数ニ基テ訓練終了ニ實際通信使用得鳩称ニシテ總鳩数意味ニシ)								
霞	捕	馬	鎗	大	舞	佐	号	捕
隊	名	防	防	防	防	防	防	防
應役鳩数	(羽)							
二五	〇	七	七	五	五	五	五	五
三	〇							

海軍

昭和八年七月 大倉納

別表第二

昭和八年度海軍大演習中（七月三十一日）間ニ於ケル軍機動
員数配付区分及通信回数（横須賀防備隊）

月日	機載又ハ補充数	船艇配付区分	陸上施設	通信回数	記事
八月三十一	二六	(夏) 一八	(夏) 一八	三	夜間通信一
八月三十一	四八	(夏) 三二	(夏) 一六	九	夜間通信一
八月三十一	七八	(夏) 六〇	(夏) 一八	一二	
八月三十一	三七	(夏) 三七	(夏) 一八	四	
八月三十一	一八	(夏) 一八	(夏) 一八	三	
八月三十一	一八	(夏) 一八	(夏) 一八	二	
八月三十一	三二	(夏) 一六	(夏) 一六	六	夜間通信一
八月三十一	四二	(夏) 三〇	(夏) 一六	七	

海軍

昭和八年七月 大倉納

海軍

昭和八年七月 大倉組

第六節 軍艦戰術的價值

軍艦通信ハ其性能上ハ秒ヲ爭フ洋上戰畧戰術的通信法トシテ有利ナルモ、昨ハ勿論ナリ然レ共本通信ハ又他種通信法ノ止及シ能ハサル長所特長ヲ有レ科學的通信法ノ缺陷ヲ充足シ得ルモノナリ而シテ特長ノ主ナルモノヲ舉ゲレバ

一 通信法極メテ簡單ナリ即チ發信之何等ノ設備ヲ要セズ又發信者之何等專門的技術ヲ要セズ誰人ニテモ使用シ得

二 精細ナル字表、畧圖及長文ノ信文ヲ輸送シ得

三 隱密ニ發信シ得

四 混信防信ニ便ナシ

五 通信時刻ノ制限ヲ受フルコトナシ

海軍

昭和八年七月 大倉納

へ火急場合(科学的通信器具ヲ搭載スル暇ナキトキ)派遣
船艇、自動車等ノ通信ニ適ス

ト、近距離通信アリテ、通信系統關係上通信速度亦
無電ヲ凌駕スルノト要々アリ

天候接近我海軍ニ於テ強力場ノ養成法案出セラル之ニ
依リ養成訓練セラル場ハ相當程度ノ荒天ニ於テ
モ能ク通信任務ヲ達成レ得

是レ平時於テ軍艦ヲ擧行セシ小艇艇ハ無電ノ有無ニ
拘ラズ能ク之ヲ利用レテ通信目的ヲ達成スル所以ナリ
殊ニ有事ノ際通信杜絶シタル場合港灣防禦ノ船艇
ヨリノ連絡トシテ唯一ノ通信機關タルベシ

第二章 鳩ノ歸巢能力研究

第一節 鳩ノ歸巢性

傳言鳩ト稱スル特種ノ鳩ハ自己ノ巢ニ對シ一種強烈ナル愛着
心ヲ有シ之ヲ能ク訓練ストキハ直視ノ及バヌ數百軒ノ遠距離ニ於
テ放サレタル時ト雖モ能ク記憶ヲ辿リ自ラ其ノ方向ヲ判定シテ歸
還シ得ル性能ヲ有スルモノナリ

乃々此ノ歸巢性ヲ吾人ガ利用スルモノニシテ其ノ本源ヲ探求スレバ
從來幾多ノ學說アルモ未ダ以テ權威アル絶對的證明解說
ヲナシ得ルモノナシ往路逆行說、三半規管說、大氣威說、波動
威說、磁力威說等ハ皆然リ

於是今日我海軍ニ於ケル實驗上ヨリ推測スルニ次ノ解說が最も
合理的ニシテ信賴シ得ルモノト信ズ
イ卓越セル肉眼視力ヲ有ス

海軍

昭和八年七月 大倉納

口一定期間特・優秀ナル視覚的記憶力並聯想力ヲ有ス

高空飛行飛翔中實・分秒間・能ク周圍數十點ニ點在
セル地物（夜間ニテハ燈光・光芒等）ヲ看破シ之ヲ精密・腦
裡・收メ置キ相當期間能ク之ヲ記憶ス

而シテ最良ノ記憶スル數々月位ナランモ自己ノ棲ミ慣レル土地
等ニ數々年間記憶スルコトアリ

ハ頭腦優秀特・物的判斷ニ富ム

ニ熾烈ナル歸巢意志ヲ有ス

ホ體力特・優秀ニシテ能ク長時間ノ空中飛翔ニ堪ヘ且飛翔

ニ最適ノ翼利ヲ有ス

右五項ノ内何レヲ失モ歸巢能力ニ大ナル缺陷ヲ生ズルコトハ次ノ

實驗ニヨリ想像スルコト得ベシ

一 空晴レ視界良好ナルトキハ著シク方向判定良好ナリ

(視覚ニシテ物体認識容易ナルニ因リ)

二) 視界不良ナルガ又ハ前回飛翔地ヨリ一躍大距離ノ延伸放槍

(普通) 物ヲ觀察セシムルタニ次ニ適當ニ延伸シテ放槍ヲ行フモ

ノナリ) 實施シタル場合等凡テ既知ノ好目標ヲ得難シト認メ

ラルル場合ニ方向判定極メテ苦難ニ陷ル

(物體認識ノ難易ガ方向判定ニ及ボス影響)

三) 濃霧等其ノ他ニテ視界極メテ狭小ナルトキハ如何ニ良ク訓練セラ

レタル優秀艦ト雖モ遠距離(洋上ニ於テ殊ニ然リ)ヨリノ歸

巢ニ殆ンド困難ナリ

フ場合近距離ニシテ且熟地ニ於テハ卒フジテ歸巢シ得ルモ飛

翔距離ニ對シ多大ノ時間ヲ要ス

(右項ニ同ジ外ニ濕氣陰闇等モ多少影響有スベシ)

四) 濃霧ニ遇ヒ歸巢シ得ザリシ艦ハ其霧中ルヤ相次グ歸巢

スル例トス

(物體ノ認識容易ナルヲ以テ)

(五) 降雨中ニモ視界相當ニ廣キトキハ特ニ飛翔ニ障礙(大雨ニテ翼ハ暗昧分ヲ洗ヒ落サル場合等)ナキ限り能ク歸巢ス

(濕氣陰闇等ノ歸巢ニ及ボス影響ヨリ之ヲ視界遮蔽ノ場合ハ此スル左程大ナルモノニアラザルヲ知ル)

(六) 夜間放機ニ於テ月明ノ夜ハ暗夜ニ比シ歸巢成績一段良好ナリ

(物體認識シ易シ)

(七) 塙舍附近ニ燈火管制シタル場合ハ日常(燈火管制ヲナサザル場合)ニ比シ歸巢成績大ニ減退ス

右ノ場合暗夜ナルトキハ其ノ傾向著シ

(目標ヲ得ルニ困難)

ハ既訓練方向ヨリハ數百料ノ遠距離ヨリ能ク歸巢シ得ル
 尙ヲ未訓練ノ反對方向百料以上(五十料以内ノ近距離
 ニテハ毎日舍外飛翔ノ際觀察シアルヲ以テコノ實驗ハ無
 効ナリ)ヨリ放尙スルトキハ大部ノ尙ニ満足ニ歸巢スルヲ
 得ズ

(既知ノ目標ヲ得ラズ從テ方向判定困難)

但シ放尙セル尙ハ其ノ地降着セザル限り東西南北ノ何レカ
 ニ向フモノナルヲ以テ稀ニ僥倖ニシテ尙舍方向ニ飛來シ途
 中ニテ既地ノ目標ヲ捉ヘ大部ノ尙が無事歸巢スルト
 モアリ得ルモノニシテ之ヲ以テ直チニ尙が靈妙ナル潜在的能力
 ヲ有スルモト斷ズルヲ得ズ

カ一定地點及其ノ附近ヨリ頻繁ニ放尙スルトキハ歸巢成績

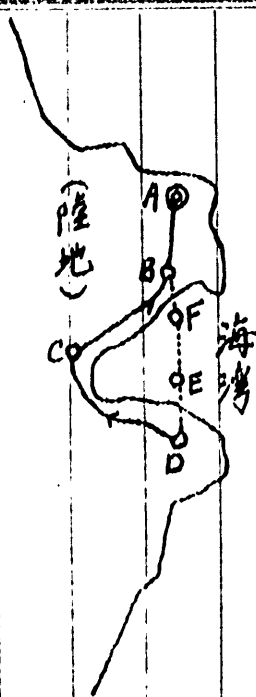
殆ンド一定ス

(方向判定完全トナリ一定路ヲ飛翔シテ歸來ス)

(十) 放鳩訓練ノ際鳩ノ歸還徑路ヲ觀察スルニ概ネ安全率大ニシテ且認識シ易キ空路(海岸線上等)ヲハルト多シ

(保安上竝ニ記憶上ノ關係ナラン)

(十一) 前項ノ場合管理者ノ適切ナル訓練ニ依リ空路ヲ變更セシムルヲ得



例 Aヲ鳩舎トシDヲ放鳩地点トスレバ

鳩ハ通例D.C.Bヲ經テ歸巢スルモ

E.F間ニ於ケル訓練ヲ勵行スレバ

D.E.F.Bヲ空過シテ歸巢ス

(十二) 海上放鳩ニ於テ點々トシテ島嶼散在スル地域(伊豆七島ノ如ク)ニ於テ歸巢成績概ニ確實ナルモ之ニ及レ何等目標ヲ

海軍

昭和八年七月 大倉納

海軍

昭和八年七月 大倉納

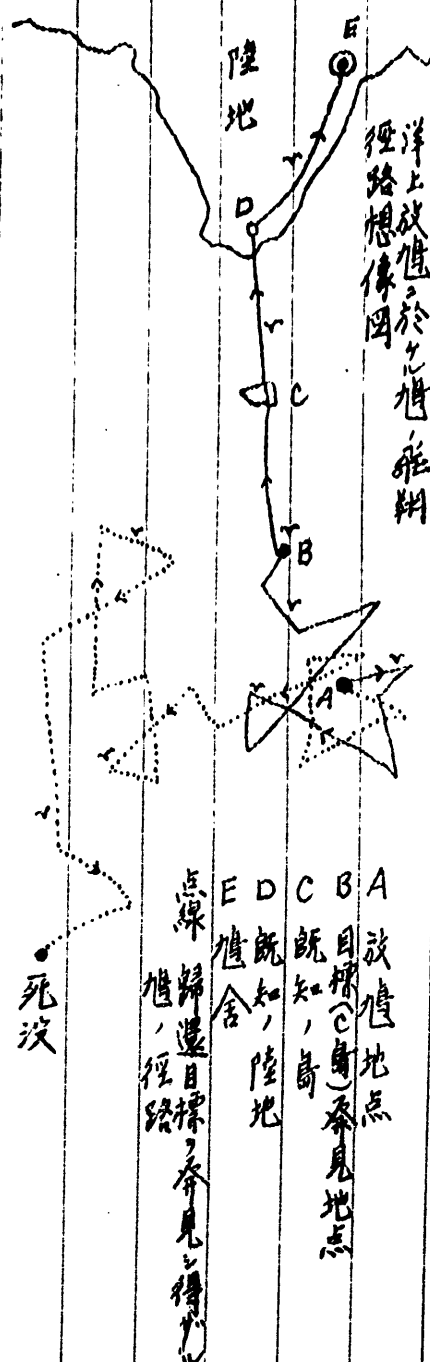
捉へ得サル洋上ニアリテハ全ク不確實ナリ

コノ場合艦ハ歸還目標ヲ捉へ得ルヲ右往左往シ而シテ之ヲ

得ルトキ始メテ歸還シ得ルモ然ラザル場合果モナリ洋上ヲ彷徨

徨シ遂ニ力盡キテ死没ノ悲運ニ陥ルカ如シ

洋上放艦ニ於ケル艦艇航路想像図



(1) 放艦ノ際歸路ノ好目標(既知ト雖見シヤ高山、都市、島嶼等)
ヲ得ラルル場合之ニ向テ飛翔スルト多シ又之等類似ノ目標
ニ對シテハ屢々失敗ヲ演スルコトアリ

海軍

昭和八年七月 大倉納

曾テ佐世保防備隊、軍艦が佐世保ト長崎トヲ間違ヘテ
多數、艦が長崎ニ舞ヒテミタル實例アリ

(記憶力判断力並聯想力ヲ示ス)

(五) 艦舎又ハ其ノ附近ニ物的變化ヲ及ボシタルトキ鋭敏ニ之ヲ感知ス
例ハ心到着臺ノ板一枚ノ増減ニテモ能ク之ヲ感知シ慣ルルマデ
入舎ニ影響ヲ及ボス

(記憶力ヲ表ハス)

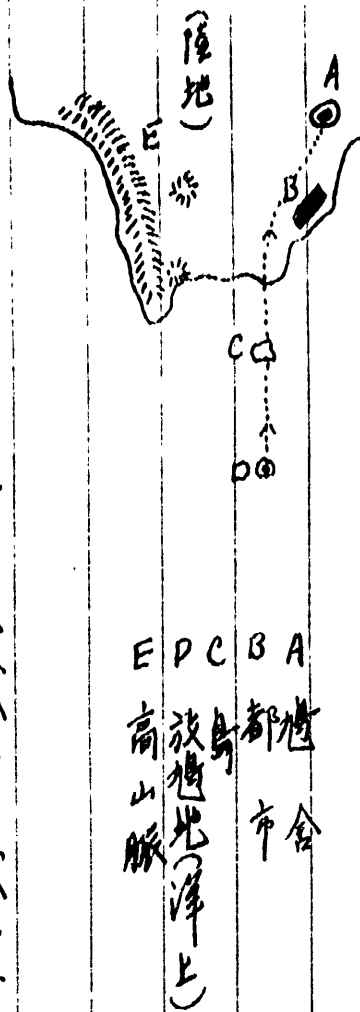
(五) 距離放艦(百五十軒以上)ニ於テ歸巢成績ヲ檢スルニ前
回放艦後數ヶ月ヲ隔テ其ノ成績ヲ維持スルモ此ノ期間ヲ
過グバ漸次遞下シ引續キ其ノ方向ニ保能訓練(復習
訓練ヲ云フ)ヲ課セザルト一ヶ月以上ニ及ブトキハ特別ノ場合
(特別優秀艦ナリ又ハ地勢上自然ニ艦が歸巢方向ニ引キ
着ケルル場合)ヲ除キ歸巢全ク不確實トナル

海軍

昭和八年七月 大倉結

(記憶力ノ一定期間ナルヲ表ス)

(例)地勢上歸還方向ニ引キ着ケレ易キ場合



(ナ)日常歸巢成績良好な地域ニ於テ俄ニ皚々白雪ニ覆ハレタ
 ルトキ放牧スルニ假令降雪既ニ止ミ視界ノ廣漠タルトキト
 雖モ歸巢成績甚數不良ニ陥リ遠距離ニアリテ數多ノ
 未着鳩ヲ生ズ

フノ場合解雪シテ常ノ状態ニ歸スルニ從ヒ陸續トシテ歸
 巢ス

(色彩、変化、對する記憶力ヲ示スモノシテ又記憶力ト方向判定トノ密接ナル關係ノ表現ト見ルベシ)

以上實驗ノ結果ヲ綜合スルニ從來不可解事視サレシ鳩ノ方向感モ肉眼視力並視覺的記憶力及判斷力ヲ缺カスルトキハ全く成立シ得ルヲ明カシテ又之等が方向判定ノ主因ナルベキトハ想像スルニ難カキモ若シ他ニ科學子カシ以テ解説不可能ナル潛在的能力(鳩ニ其ノ輸送中無意識ニ經路ヲ靈妙ニ一官能中感得シ此ノ印象ヲ及對順序ニ展開シテ其ノ經路ヲ逆行スト云ヒ又、鳩舍附近ヨリ飛散スル何物カノ感覺ニ依リ方向ヲ判定シテ歸巢スト云フ如キ解説)アリトスルモ果シテ如何ナル狀態ニ於テ鳩ノ方向判定ヲ支配スル程大ナルモノアラザルトハ以上ノ實驗ノ證明ス所ナリ

第四、第五項・對シテハ解説ノ要ナカレバシ

要ト鴫が遠隔ノ地ヲ能ク歸巢シ得ル所以ハ以上ノ解説及
 實證ニ依リ略其ノ格心ヲ表トシ得タルモノト云フベク之ヲ要約ス
 レバ卓越セル肉眼視力並優秀ナル視覚的記憶力及發達
 セル頭腦等ニヨリ歸巢方向ノ判定ヲ與ヘ全身ニ溢ルル歸巢
 意志ト優秀ナル體能ニ加ヒテ飛翔ニ最適ノ翼羽等ノ作用
 ニ依リ高速度ニ體能ヲ運搬シテ歸巢スルアルトハ殆ンド疑
 フ餘地ナキモノト信ズ

第二節 鴫ノ夜間視力

鴫ノ歸巢性ニ於テ述ベタル如ク肉眼視力ハ鴫ノ方向判定上極
 メテ重要ナル役割ヲ演スルモノナリ、此ノ卓越セル肉眼視力ハ能ク
 暗夜ヲ透過視シ得ルモノナリ又夜間ハ全ク視力ヲ失フモノナリ
 ヤ、本事項ノ研究ハ夜間鴫養養成上極メテ重要ノ事項ナルヲ
 以テ次ニ實驗ノ結果ヲ述ベララカ解決ノ資料ニ供ス

(一) 暗夜飛翔中或ハ機舎ニ歸着ノ際架空線其ノ他ノ物體ニ衝突スル機ノ頻出スルヲ目撃ス

又夜間飛翔訓練ヲ頻繁ニ實施スルトキハ各所ニ機ノ衝突慘死體ヲ發見スルコトアリ

(夜間視力ノ不充分ナルヲ示ス)

(二) 夜間極メテ靜カニ機體ノ近邊ニ手又ハ他ノ物體ヲ近ツクレバ

能ク之ヲ看破シサキ指先ニテモ殆ド啄打ヲ誤ス又夜

間(薄暮)放機直後ニ於テ巧ミニ架空線等ヲ避ク而シ

テ其ノ狀態ハ聴覺ニ因リ避クモト思考スルヲ得ズ

(視覺ノ存在立證)

(三) 暗夜機舎ニ燈光ヲ照ズル能ク果粒ノ如キ飼糧ヲモ啄取

シ得ルモ燈光ヲ滅スルニ之ヲ爲シ得ズ

(光明ト視力トノ關係ヲ示ス)

日月明時ニ於テ夜間放燈アリテ直距離ニ十料ヲ越ス場合
ニモ傷ハ尙相當數ノ集團ヲ保持シテ歸合スルヲ敢テ珍ナ
シカラザルモ暗夜ニテハ特別ハ距離(十料以内)ニ於ケル場合
ノ外集團ヲ歸合スル例極メテ稀ナリ

(前項ニ同ジ)

以上ノ事實ヨリ推斷スルニ暗夜ヲ透視シ得ル視力ヲ有セザ
ルモ亦夜間ト雖モ全ク視力ヲ失フモノモアラズ其ノ程度ハ一明
暗度ノ如何ニヨリテ決定セラルルモノニシテ恰モ人間ノ視覺ニ於ケル
カ如シ然モ空中飛翔ニヨリ視力ニ急物體ノ認識ニ對シテ人間
以上ニ有利ノ地位ニアルモノト云フベシ

實際上透視竝ニ距離物體ノ認識ハ上空ヨリ行フトノ有利ナ
ルヲトハ轉ニ説クマデモナラ殊ニ夜間盆地ノ村落竝ニ市街等ニ照
在セル無數ノ燈光又ハ光芒山岳起伏ノ狀態及水陸境界

線等ノ認識ノ容易ナルト地上ニ於テ想像以上ナリ、是鳩カ
暗夜ニ於テモ尚歸巢目標ヲ捉ヘ得ル所以ナリトス

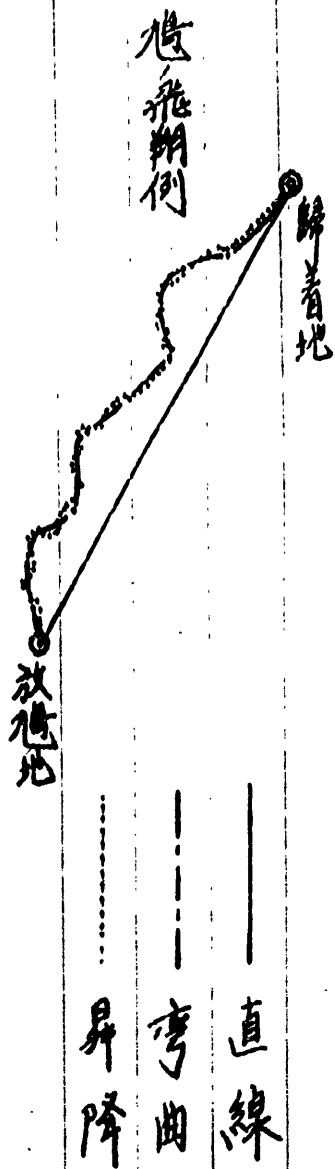
第三節 軍鳩通信速力並通信距離

軍鳩通信速度ハ鳩ノ素質、距離、天候、管理法、健康狀
態及地勢等ノ差異ニ依リ一定シ難シト雖モ其ノ總テラ普
通ノ狀態ニ於テモトストキハ優秀鳩ハ平均一分一秒ナレドモ
普通鳩ハ平均速力ハ大凡一分六十乃至八百米突ト見做
スヲ適當トス蓋シ鳩ノ飛翔速力ハ單ニ飛翔力ノ優劣ノミ
ニ依ルモノニアラズシテ帰還方向ニ對スル判定ノ良否ハ著シク
成績ヲ左右スルモノナレバナリ故ニ中等鳩以下ノモノニシテ時ニ平均
一分一秒以上ナルトアリ又優秀鳩ニシテ平均分速ニ一秒以上ヲ算
スルヲトモ敢テ珍ラシカラス然レドモ多數ノ鳩ノ内ニ其ニ歸
舎ニ歸ルモノナキニアラズ故ニ軍鳩通信速度ハ中等鳩ニ於ケル

海軍

昭和八年七月 大倉納

平均成績ヲ以テ其ノ標準トスル可トス（別表第三四参照）
 尚本項ノ通信速力ハ概ガ放機地及歸着地ヲ連結セル直
 線上ヲ飛翔スルモノトシテ算出セル通信上ノ速度ニシテ概ノ實際
 飛翔速力ト別物ナリ蓋シ概ハ直線上ヲ飛ブモノニアラスシテ
 左圖ニ示ス如ク地勢、氣流、其ノ他ノ關係ヨリ上下又ハ左右ニ
 昇降、彎曲スルヲ以テ實際ノ飛翔速力ハ通信速力ヨリ遙
 ニ大ナルモノニシテ通例一分時ニ一五秒附近ノ速力ヲ以テ飛翔スルモノ
 如シ



通信距離モ亦種々状況ニ依リ差異アリテ一定シ難シト雖モ大體次ノ如シ

一、晝間通信舎（陸上固定）

海陸両方面共ニ三百料以内トスルヲ適當トス

二、夜間通信舎（陸上固定）

イ、晝間通信

夜間通信、晝間通信成績一般ニ晝間通信同様ナリ然レ共晝夜共ニ使役セラルヲ以テ晝間通信舎ニ比シ員荷一層大ニシテ晝間固定通信舎ノ如ク大距離ニ於ケル使用ニ稍困難ヲ感ズルヲ遺憾トス

通信距離ハ二百料以内ヲ適當トス

ロ、夜間通信

使用時刻、天候及明暗、度程度等ニ依リ差異アルモ可能程度

ハ凡百料以内ヲ五十料以内ニ於テ使用ヲ最通當トス

別表第三

昭和八年二月ヨリ翌九年一月ニ至ルケ年間各飼育聴ニ於ケル軍馬通信綜合表(實際通信ミヲ掲ゲ訓練ノ人言ズ)

係臨離係用回数

平均連方
数(晝夜別)

使用部隊(回数)

百料以上

一九七二

晝

横防(三) 吳防(一三) 霞室(五)

五十料以上

二二六

晝(二〇五)

横防(六八) 吳防(三二) 大防(六三)

百料未満

夜(七)

霞室(三〇)

五十料未満

六七六
七四五

晝(二六六)

横防(九一九) 吳防(二九) 佐防(四九八)

夜(五〇)

并防(二八二) 大防(一一三) 鎮防(一五三)

馬防(七三) 横室(三七八) 霞室(六四)

海 軍

昭和八年七月 六倉納

昭和八年七月 大森

海軍

別表第四

軍艦通信高速度記録

横須賀防備隊

年月日	放艦地	歸着地	距離(海)	氣	天	候	視界(海)	雲	風	向	速	氣溫
	大島				放艦地	B	20	/		SE.2	/	
8-8-15	風早燈台	横防	63	霧	歸着地	B.C	15	CL 3		SE.4		28
艦番	性別	年齢	放艦時刻	入会時刻	経過時間 (時一分)	速力(%)	記 事					
B.99	♀	2	0605	0635	0-29	2179	通信文携行(大漢習)					
B.75	♂	2	"	"	"	"	"					
B.49	♂	4	"	"	"	"	"					
B.42	♂	2	"	"	"	"	"					
B.17	♂	4	"	0650	0-45	1400						
B.133	♀	2	"	0700	0-55	1146						
備考	♂ハ雄 ♀ハ雌											

0692

海軍

昭和八年七月 大倉納

第四節 軍艦通信精度

只一羽ノ艦ヲ使用スル場合、通信精度ハ天候、距離、其他ノ
 状況ニ依リ零乃至百パーセントナルモ艦通信ニ於テハ必ラズ同
 一信文ヲ二羽以上ノ艦ニ托スルヲ原則トシ且必要ニ應ジ艦数
 ヲ多クセントモ依リ必ズ通信ノ目的ヲ達シ得ル様ニ處理シ得
 ルモノナリ

昭和五年六月横須賀鎮守府戦闘通信ノ際横須賀防
 備隊ニテ調査セル軍艦通信成績次ノ如シ

一 軍艦通信到達成績表

年月日	送信回数	有効受信回数	到達率	備考
昭和 五、六、二五	一一	一九	九〇、四	主トシテ晝間通信
六、二六	一六	一五	九三、七	
合計	二七	三四	平均九一、八	

海軍					
昭和八年七月 大倉納					
八軍艦使役成績表					
年月日	通信使用 有効時間内 有効時間後	通信使用 有効時間内 有効時間後	失跡 使用艦数 対	備考	
五、六、二五	二一	〇一五七、一	三一、一四二	七二五、二	備考
六、二六	一六	〇一三八、二	二三、五六〇	八七〇、六	
年月日	調査 平均経過時 分	平均距離 (米)	通信速度 米/分	備考	
五、六、二五	二一	〇一五七、一	三一、一四二	七二五、二	備考
六、二六	一六	〇一三八、二	二三、五六〇	八七〇、六	
年月日	調査 平均経過時 分	平均距離 (米)	通信速度 米/分	備考	
五、六、二五	二一	〇一五七、一	三一、一四二	七二五、二	備考
六、二六	一六	〇一三八、二	二三、五六〇	八七〇、六	
合計	八〇	七四	五	一	備考

第三章 夜間鳩養成法研究

第一節 研究経過概要

夜間鳩養成法は我海軍に於て、大正十三年春當時軍鳩基礎機関より横空に於て飼育を嚆矢トス
當時横空に於て、建機坪、五坪、廢物小屋ヲ利用シ之に
幼鳩を下羽ヲ收容シ研究ヲ開始せん成績良好ニシテ
夜間鳩巢を鳩、養成し得ル確信ヲ得ルヲ以テ大
正十五年之に養成法(石井特務少尉編纂)ヲ部内各
飼育室に配布セリ

昭和三年三月横空に於ケル研究資料に基き同隊に夜間
鳩舎(棟)建設費六三〇日ヲ新設シ(層之に研究、努力
傍、晝夜間、実用ニ供セリ

昭和三年六月横空に於て再び夜間鳩養成大意(石井特務

少尉編纂)ヲ部内各創育館に配属シ之の發達ヲ期セリ
此頃各館に於テは横空に倣ヒ相次ク之の創育ヲ開始セ
リ昭和四年四月(軍艦基礎機關が横空ヲ横防ニ移
轉セリ)以テ横防に於テハ一時旧艦上塲舎ヲ改造シ夜間
塲養成に宛テ之が研究ヲ繼續セリ

昭和五年海軍特別大演習費(二五〇〇月)ヲ以テ横防は防
法防、大防、馬防等ニ夫々夜間塲舎(棟(五〇〇月)宛設置
セリ

昭和六年春横防は潜水隊舎建設ト共ニ同屋上ニ理
想の夜間塲舎建設セラルニ及ビ本研究ハ一般發展ヲ見
ルに至レリ

如斯シテ積年苦心研究ノ勞ハ酬ヒラレテ昭和七年
十一月横防(基礎機關)に於テ世界使塲術上其類

ヲ見ザル獨創ノ夜間鳩養育法(石井特務中尉編纂)
ヲ案出スル、及び夜間鳩ノ能力増大シ現狀ニ於テハ
深夜ト雖モ殆ント一〇〇パーセントノ通信能率ヲ得ル
コトアリ

尚本鳩ノ特長ハ晝夜共に使用シ得ル点ニシテ、他鳩
ノ追越ヲ許サズル處ナリ

第二節 夜間鳩研究ノ要旨

凡ソ鳩ハ一般鳥類ト同様、其活動性ヲ晝間
ニ發揮シ、夜間ハ全ク休息スル天性ヲ有スルナリ。従テ夜
間ニ對スル活動意志ヲ缺キ、又暗夜飛翔ニ對スル充分
ノ視力ヲ有セズ、且ツ極メテ體弱ナル性質ヲ有スルヲ以テ
夜間棲息所ヲ離レズトシ、極度ニ恐怖スルナリ
然レ一方、於テ他ノ鳥類ニ比較シテ熾烈ナル